

「コロナ専門」大阪・十三市民病院の苦悩

写真は朝日新聞 12 月 3 日朝刊。全国初の「コロナ専門病院」となった大阪市淀川区の十三市民病院の苦悩を伝える。1 面記事を抜粋して紹介したい。

十三市民病院は元々、18 の診療科を持つ総合病院だった。緊急事態宣言下の 4 月 14 日、松井一郎市長がコロナ専門病院にすると表明。だが、専門病院化は大きな痛みを伴った。4 月 16 日から外来や初診、救急、手術を順次休止し、約 200 人いた入院患者全員を転退院させ、出産予定だった 280 人の受け入れ先探しは難航した。元々あった結核病棟で 20 人近くのコロナ患者を受け入れていたが、他のフロアで感染防止の工事を進め、5 月から 90 床での受け入れを始めた。

しかし、6 月ごろから、医師や看護師らが次々と辞めていった。10 月までに医師 4 人、看護師 14 人を含む 25 人ほどの職員が病院を離れ、全職員の 7% を占めた。本来の専門分野の患者を診られなくなった医師や分娩に立ち会えなくなった産科の看護師らがいた。

病院では、離職を防ごうと、7 月から産科以外の外来を再開したが、利用者はコロナ禍前の半分程度にとどまる。また、コロナに感染した入院患者の約半数は 80 代で、食事や排泄の介助が必要な人が多く、看護師不足に拍車をかけた。11 月に入って感染者が増加しても、コロナ患者の受け入れは 60 人程度が限界だった。

十三市民病院の西口幸雄院長は「精神的な負担を考えると、離職を防げないかもしれない」と話す。府は 11 月末、重症者を診る「大阪コロナ重症センター」(30 床)を完成させたが、看護師の確保に苦戦。吉村洋文知事は全国知事会などに看護師の一時派遣を要請した。

ほかにも課題はある。中等症専門の十三市民病院に EOMO はなく、人工呼吸器も 2 台しかない。重症化した場合、府の窓口を通じて重症者対応の病院への受け入れを打診するが、しばしば難航している。「第 3 波」による重症者の急増が背景にあるという。

西口院長は「うちには戦う術がない。重症化して転院させられなければどうしようもない。一つの病院に負担を強いるのはおかしい。可能なら、専門病院の名前を外してほしい」と訴えた。

唐突な松井市長の「コロナ専門病院」にするという表明から、十三市民病院の混乱は始まった。現場の声がきちんと反映された判断とは言い難く、ここにも独断的で一方的な市政運営の弊害がみられる。大阪市は足もとからコロナ対策に全力をあげるべきだ。

(2020 年 12 月 5 日)

